

5年「日本の地形と気候」にプラスワン

(教科書では『小学社会5上』p.14~19)

この小単元の配当時間は3時間だけであり、日本全体の気候と地形の特徴をつかむのが目標である。気候や地形と生活とのつながりは、次の小単元「自然条件と人々の暮らし」でくわしく取り上げるとい構成になっている。

1 発言しやすい発問をプラスワンして、児童を授業に引き込もう

1時間目は、教科書p.14の桜前線(資料カ)、紅葉前線(資料キ)の地図を使って、日本各地の気候の違いや地形との関わりに目を向けさせていく。

けれども、いきなり桜前線の地図を見せて、「どうして同じ日本でも、桜の咲く時期が違うのかな」と問うのは、児童にとっては唐突な印象を受けるだろう。資料の読み取りが苦手な児童や知識の少ない児童には、丁寧な導入が必要だ。

児童は、この小単元の前に、世界の主な国名や日本の領土について学習している。

そこで、「外国から来た人に『日本はどんな所ですか』と聞かれたらどう教えますか?」と発問した。

誰でも発言しやすい「大きな問い」から授業に入り、少しずつ学習内容に視点を絞っていくという手法は、時間はかかるものの、関心・意欲の高くない児童を授業に引き込むためには効果的な方法だ。

児童の発言をグループ分けしながら、簡単に板書していった。授業の核心に迫る場面以外は、板書に時間をかけず、テンポよく進めていく方がよい。

「食べ物」	・ 食べ物が安全でおいしい	・ 食べ物の多くを輸入している	・ 和食を食べている	
「文化」	・ 和の心がある	・ 古い文化がある	・ お笑いがさかん	
「技術」	・ 優れた技術がある			
「観光」	・ 温泉が多い			
「仕事」	・ 田んぼや畑が多い			
「自然」	・ 自然がいっぱいある	・ 火山が多い	・ 地震が多い	・ 四季がある

T)「食べ物」や「技術」「仕事」については、6月からの社会科でたくさん学習します。「文化」は6年生で出てきます。

T)「自然」の中でも、火山や地震は「地形」に関係することで、四季は「気候」に関係します。今回は、この地形と気候の学習をしましょう。

こう話してから、桜前線、紅葉前線の2枚の資料を提示し、発問した。

T) この資料から、わかったことを見つけましょう。

児童からは様々な気づきが発表された。

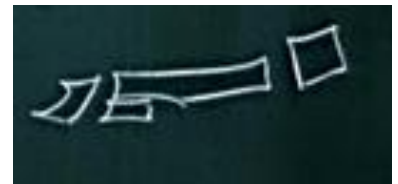
- C) 北海道は、桜が咲くのが遅い。
- C) 沖縄は1月に桜が咲く。
- C) 北海道と沖縄では桜の咲く時期が4か月ちがう。
- C) 桜が咲く時期は、暖かい地方では早く、寒い地方では遅い。
- C) 桜は、南から北へと順に咲いていく。
- C) 紅葉する時期は、山地が早い。沖縄にはかえでやもみじがないのかな。
- C) 北海道は紅葉する時期が早い。北から鹿児島へ、順に紅葉する。
- C) 寒い地方から暖かい地方へと紅葉していく。

T) 桜は南から咲き始めて、北へ行くまで4か月かかる。紅葉は逆に、北から始まり南へ向かう。つまり、どういうことが言えるでしょうか。

そう尋ねると、「場所によって気候が違う」という答えが返ってきた。

「では、どうして場所によって気候が違うのだろうか？」と発問したが、さすがに難しくて反応がない。そこで、東西に長い横長の日本地図を黒板に書いた。(右写真)

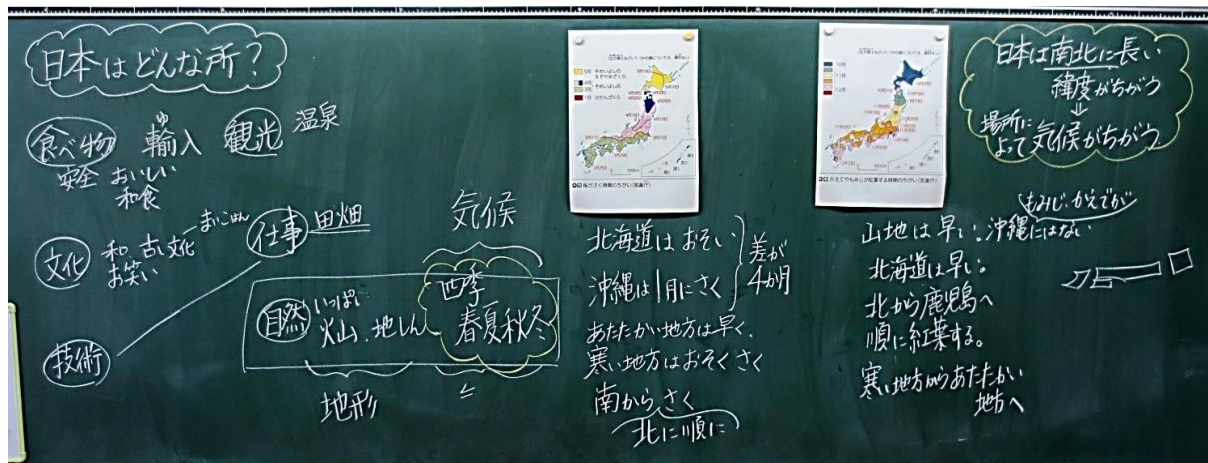
T) 日本がこういう形でも、桜や紅葉は同じようになるでしょうか。



もともとの日本列島と比較することで、児童の思考が活性化した。

- C) 南北に長いからだ。
- C) 緯度が違うからだ。

南北に長いという日本列島の地形的な特徴が、気候の違いにつながっていることに気付くことができた。



2 情報量が多い時には、資料を絞って提示しよう

3時間目は、日本全国の気候について学習する。日本を六つの気候区分に分け、それぞれの気温と降水量のグラフを提示して、気付いたことを話し合う。

しかし、児童によっては、資料が多くて目移りしてしまうことが考えられる。

そこで、まず太平洋側と日本海側を比べさせた。はじめに、日本地図を書き、その中央を山地・山脈が連なっていることを確認した。

続いて、「太平洋側と日本海側では何が違うだろうか」と発問すると、児童は、「気温」「人口」「食べ物」「とれるもの」「天気」を挙げた。「冬に新潟のおばあちゃんの家に行くとき、東京は晴れていたのにトンネルを出たら雪だった」と自分の経験を話す子もいた。

T) 太平洋側と日本海側の気候の違いを探しましょう。

そう指示して、教科書や資料集から気候の違いを探させた。

C) 日本海側は冬に降水量が多く（雪）、太平洋側は夏に多い（雨）。

C) 夏の気温はどちらも同じくらいだけど、冬は日本海側が少し低い。

児童の発言をもとに、太平洋側と日本海側の気候の特徴をまとめたあと、教科書 p. 18 に掲載された四つの地域のグラフに注目させていった。

C) 網走市は寒い。意外と降水量が少ない。

C) 松本市は気温が低い。降水量も少ない。

C) 高松市は、雨が少ない。

C) 奄美市は、気温が1年中高い。雨も多い。

『日本は場所によって、気温や降水量にちがいがあ』とまとめた。

最後に「冬の日本海側に雪が多いのはなぜか」について学習した。

「大陸からの冷たい季節風」に「日本海の水蒸気」が加わり、それが「日本列島の山がちな地形」にぶつかって雲が発達し冷却されることによって、「大量の雪」が降ること、そして、湿気のなくなった風が山を越えていくことで、太平洋側では乾燥した晴れの日が続くという仕組みを、図を描きながら教えていった。

資料が多い場合は、まず読み取る資料を絞って提示し、特徴をつかんでから、他の資料へと広げていく。スモールステップで順を追った指導をすれば、どの児童もついてこられるようになる。

(2017年5月)

あらし げんしゆう
嵐 元秀 東京都の公立小学校教師。教師歴 29 年。楽しみながら、調べ・考え・表現する力が高まっていく社会科授業を旨として研究・実践をしている。